

全般季節予報支援資料 暖候期予報 2019年4月24日

予報期間：2019年5月～2019年8月 気象庁地球環境・海洋部

1. 今回の予測資料と考え方

前回予報根拠を見え消し（削除部分は取り消し線、追加部分はアンダーライン）で記述。項目ごとの囲みには、前回と今回の予測資料の差などを記載する。

- ① 熱帯の海面水温（SST）は、ニューギニア島の東から太平洋東部の赤道域で高温偏差で、エルニーニョ現象時の特徴が続く予測。~~2月12日~~4月10日発表のエルニーニョ監視速報でも「今後夏にかけてエルニーニョ現象が続く可能性が高い（80%）」としている。エルニーニョ現象発生の確率は70%から80%へ変わった（見通しの変更はなし）。

↑前回と同様。

- ② 熱帯の対流活動（降水量、200hPa 速度ポテンシャル）は、SST の分布に対応して、ニューギニア島の東から太平洋東部の赤道域で活発な予測。一方、フィリピンの東では対流活動が不活発で、インド洋から太平洋西部にかけてのアジアモンスーン域は広く上層収束偏差。

↑前回と同様。

- ③ 上層の循環（200hPa 流線関数）は、インド洋から太平洋西部での上層収束偏差に対応して、チベット高気圧の勢力は平年より弱く、大陸から日本付近にかけて偏西風は平年の位置の南を流れる予測。

↑前回と同様。

- ④ 下層の循環（850hPa 流線関数、海面気圧）は、フィリピンの東での不活発な対流活動に対応して、フィリピンの東で高気圧性循環偏差、本州付近で低気圧性循環偏差となる逆位相のPJ パターンが現れる予測。このため、太平洋高気圧は日本の南東で強く、日本付近への張り出しは弱い。

↑前回と同様。

- ⑤ オホーツク海高気圧については、6・7月平均を中心に現れやすい予測（6・7月平均海面気圧を参照）。一般的にオホーツク海高気圧の予測精度は低いですが、逆位相のPJ パターンのときは、東シベリアからオホーツク海の上空はリッジとなる傾向があり、今回の予測とは整合的。このため、北日本を中心にオホーツク海高気圧の影響を受ける可能性を予報に考慮する。

↑前回と同様。

- ⑥ 北半球層厚換算温度（大気全体の温度）は、予報期間内はアンサンブル平均で+0.6℃程度と高い予測で、気温の予報に考慮する。この高温傾向は、地球温暖化の影響が大きい。

↑前回と同様。

- ⑦ 梅雨前線の北上は平年より遅く、沖縄・奄美では梅雨の期間が長い見込みだが、盛夏期になると平年と同様に太平洋高気圧に覆われやすい。一方、北・東・西日本では、太平洋高気圧の張り出しが弱く、梅雨前線や太平洋高気圧の縁辺に沿って流れ込む湿った空気の影響を受

けやすい。

↑前回と同様。

- ⑧ 以上から、北・東・西日本では、この夏の降水量は平年並か多い見込み。夏の気温は、晴れの日が平年より少ない一方、長期的な上昇傾向を考慮し、ほぼ平年並。北日本では、北からの冷たい気流の影響を受ける可能性を考慮して、低温の確率をやや大きめに見込む。沖縄・奄美では、梅雨の時期の降水量は平年並か多い見込み。その後は太平洋高気圧に覆われ、平年と同様に晴れの日が多く、夏の降水量はほぼ平年並。夏の気温は、長期的な上昇傾向も考慮して、平年並か高いと見込む。

↑前回と同様。

2. 予報

- ・ 2月25日発表時の資料と予報根拠に大きな違いはない。前回（3月）資料では、エルニーニョ監視海域の海面水温が高く予測されたが、今回（4月）資料ではその予測が低くなり、結果として2月25日発表時の資料に近くなったため、2月25日に発表した暖候期予報の内容は変更しない。
- ・ 修正発表は行わない。

この資料は、気象事業者等が、気象庁の提供する季節予報の根拠を理解するための補助資料であり、そのままの形で一般に提供することを想定して作成したものではありません。